

2026 年 10 月 11 日聖霊降臨後第 20 主日 (マタイ 22:1~14)

そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。

(マタイによる福音書 22 章 10 節)

聖書を読んでいると、イエス様が当時の宗教指導者たちと対立している場面がしばしば描かれます。ファリサイ派や律法学者といった人たちは聖書では悪役として描かれているようです。

ファリサイ派や律法学者といった人たちは、神さまのいつけを守らず、自分の好きなように生きていた人たちでしょうか。決してそんなことはありません。彼らは律法という神さまからの掟をしっかりと守り、敬虔に生きていました。しかし自分が清くなければならないという思いの中で、他人を遠ざけてしまうんですね。その他人とは、汚れているとされた人たち。罪人、徴税人、娼婦、異邦人といった人たちのことです。彼らはそのような人たちを自分たちの側から遠ざけていったのです。

そんな彼らにとって、エルサレム神殿はどんな場所だったのでしょうか。そこは彼らの正しさを証明するような場所だったのかもしれませんが。彼らが思う正しさの中に生きる人たちの集まり、それが当時の神殿でした。しかしそこにイエス様が来られたわけです。すでにイエス様とファリサイ派とは、これまでも何度も対立してきました。いろんな対立の中で、イエス様はついにエルサレム神殿に入ってきたわけです。だからファリサイ派や律法学者は、イエス様がそこで何を語られるのか、とても気になったし、イエス様もまた、彼らに向けて多くを語ったのだらうと思います。

今日の福音書に書かれているのは、一つのたとえでした。イエス様はこのような言葉から語り始められます。「天の国は、ある王が王子のために婚宴を催したのに似ている」。これまでも何度も語られた「天の国のたとえ」です。天の国、つまり神さまの愛の中ではどのようなことが起こるのか、ということです。

今日のたとえには、王様と王子がでてきます。王様は王子のために、婚宴を催します。ところが王様は家来に言い、婚宴に招いておいた人々を呼ばせましたが、誰も来ようとしなかったそうです。さらに別の家来たちを招いておいた人々の元に遣わし、「食事の用意が整いました。牛や肥えた家畜を屠って、すっかり用意ができています。さあ、婚宴においでください」と誘ったものの、人々は来てくれなかったということです。何かどうしても外せない用事があったのかというと、そうでもないみたいです。一人は畑に、一人は商売にということは、日常の生活です。特にどうしても今日でなければならぬ用事でもないようです。

これが現実世界の話であれば、「この王様、よっぽど嫌われていたんだろうな」で終わると思います。「あんな王様の子どもの結婚式なんか、行きたくない!」、そう思ってみんなボイコットした、そういうことだと思います。しかしこれは、天の国のたとえです。ということはこの王様は神さまのことなんですね。そしてその王子とは、イエス様のことだということになるわけです。さらに婚宴に招かれるということは、王子であるイエス様を受け入れなさいということになっていくのだと思います。

となると、呼びかけに応じず、畑や商売に出かけた人たち、また家来たちを捕まえて乱暴し、殺してしまった人たちとは誰か、ということになります。一義的に言えば、2000 年前にイエス様を受け入れることができず、十字架につけてしまった人たち。

それはファリサイ派であり、律法学者であり、長老たちであったわけですが、王様はそのような人たちを滅ぼし、見かけた人は誰でも婚宴に連れてきなさいと命じた。つまり当初は招いていなかったような人たちが招かれたということになるのです。

ここまで聞くと、わたしたちはユダヤ人ではないわけですから、少し安心します。2000 年前、イエス様を受け入れられなかった人たちは、滅ぼされたんだ。わたしたちは大丈夫。そのあとで招かれたんだから、それでいい。そういうことでしょうか。

王様の家来たちは、そこら辺を歩いている人たちに片っ端から声を掛け、婚宴の会場に招き入れます。「見かけた人は善人も悪人も皆集めて来た」と書かれていますので、招かれた人たちも最初は困惑したかもしれません。でも、まったく自分とは関係のないはずの婚宴に呼ばれた。今、わたしたちはこうして集っていますが、みなさんどうでしょうか。自分はこの場所にふさわしい、自分がここにいることは当たり前だと思っておられるでしょうか。わたしは自分がこの場所に立っていることを、今でも信じられません。何度も神さまを裏切り、悲しませてきた自分を知っているからです。しかしふさわしくないにも関わらず、神さまは呼ばれました。

神さまの最初の計画では、選ばれた人たちが喜びの宴に招かれたのでしょう。しかしイエス様がこの地に来られた時に、その計画は 180 度変わったのです。最初は選ばれた人が神さまの元に行き、その人たちによってすべての人たちに福音、神さまの愛が伝えられる、それが神さまの思いでした。

しかし最初に選ばれた人たちがイエス様を否定した結果、神さまは直接、すべての人、それが善人であれ罪人であれ、すべての人を婚宴に招くことを決断されたのです。その中には、わたし

たちも含まれているのです。わたしたちがどんな人間であれ、「わたしの元に来なさい」と神さまは呼ばれているのです。

ただ聖書は、それで終わっていません。招かれた人の中に、一人礼服を着ていない人がいたそうです。でもこれ、そりゃそうだと思います。何の目的もなく歩いているときに、婚宴会場に連れて行かれたわけです。礼服を着る暇などない、そう思っても仕方ありません。でもここでいう礼服とは、物質的なものではないように思います。わたしたちは神さまから与えられた、たくさんの愛や恵みに包まれています。自分の力だけでは歩めない、そのことを知っているからこそ、神さまからいただいた賜物で自分の身を飾ります。その賜物こそが、礼服なのです。婚宴の会場に来ているにも関わらず、神さまからいただいたものをすべて脱ぎ捨て、自分の力だけに頼って歩もうとするときに、それは「ふさわしくない」ということなのです。そうではなく神さまに頼り、イエス様と共に歩むことを願うとき、わたしたちの身体は神さまからいただいたすばらしい礼服に包まれていくのです。

でもこれって、何だか洗礼と似ているようにも思うんですね。洗礼を受けるとき、わたしたちは自分の力だけでは生きていけないことを覚えます。「神の助けによって」わたしたちは生かされていることに気づかされるのです。そして洗礼は、わたしたちを清く、真っ白にすることではありません。黒くよごれたままで、でもキリストという衣を着ることで、わたしたちは神さまの前に生きる者とされるのです。

そのことを心に留め、喜びの宴に招かれましょう。こんなわたしをも招いてくださる神さまの愛を感じ、そしてわたしたちの周りにいる人たちにも、この喜びの場を集ってもらえるように、祈ってまいりましょう。